

2025年度

世界史

注 意

1. 監督者の合図があるまでは問題冊子と解答用紙を開かないでください。
2. 解答はすべて解答用紙の決められた箇所に記入してください。
記号で答えられるものは記号で記入してください。
3. 試験開始後、解答用紙に氏名・受験番号を記入してください。
4. 試験問題はこの冊子の1～10ページに記載されています。
問題冊子の白紙部分は、メモとして使用して構いません。
5. 試験終了後、この問題冊子は持ち帰ってください。

I ポーランドの興亡、再興の様子を述べた次の文章を読んで、文中の空欄
A ~ P にあてはまる最も適切な語句または数字を記入し、下線部
(1)・(2)に対応する問1・2に答えなさい。なお、人名で「何世」とつく場合にはかな
らずつけること。(例「ジョージ7世」)

ポーランドはヨーロッパ中央部にある国である。「ポーランド」(ポルスカ)とは、
本来、畑または森の中の草地の意であり、国名は「平原の国」を意味する。面積は約
32万平方キロメートルで日本の約5分の4、人口は2023年現在約3,700万人とドイ
ツ、フランス、イタリア、スペインに次ぐ人口大国である。西スラヴ系のポーラン
ド人は10世紀にポーランド王国(ピアスト朝)を建設し、カトリックを受容した。⁽¹⁾
13世紀にはモンゴルの来襲に大敗するも、14世紀には A 大王の下で盛り返
し、 B の入植やユダヤ人の移住が奨励されて経済が発展し、ポーランド最
古のクラクフ大学が設立された。なおクラクフ大学では、著書『天球回転論』で地動
説を提唱した C が学んでいる。その後 D と連合して E 朝
が発足。この王国は、1410年には B を破るなど、東欧での大国となり、16
世紀には最盛期を迎えた。

E 朝の断絶後の1572年にシュラフタ(貴族)による F 王制を導入
するも、これがシュラフタと結んだ外国勢力の介入を招くことになり、国内権力は
不安定化し、17世紀以降はプロイセン、ロシア、オーストリアの干渉を受けるよう
になった。18世紀末までにこの3国によるポーランド分割⁽²⁾によって国家は消滅し、
ポーランドは地図上から消滅してしまった。

その後フランスの G によって、一部がワルシャワ大公国として復活し、
ポーランド人は祖国再興を期待した。しかし、G 没落後のウィーン会議で
ポーランド王国が成立し、同国はロシア皇帝を国王としたため、事実上ロシアに併
合された。ウィーン体制時代には、ポーランドの民族運動が次第に活発となって、
しばしばロシア、プロイセン、オーストリアに対する反乱を起こしたが、いずれも
失敗し、その支配が続いた。この間、ポーランドでは民族舞踊マズルカやポロネー
ズを基に数多くのピアノ曲を作曲し、「ピアノの詩人」と称される作曲家の
H や、 I の発見などによりノーベル賞を二度受賞したマリ＝キュ

リーなどを輩出している。

実質的な独立を回復したのは第一次世界大戦後であった。1917年にロシア革命が勃発したことを受け、1918年にポーランド共和国として独立を宣言し、1919年のパリ講和会議で承認された。国家主席の [J] は領土回復を図ってソヴィエトと戦い、結果現在のウクライナとベラルーシの一部を獲得した。なお [J] は、ロシアからの独立運動を闘う中で、1904年に始まった [K] 戦争中に日本から招待され、支援を受けるなど日本とのゆかりも深い人物である。

1939年第二次世界大戦が始まると東西からドイツとソ連に侵攻され、再びポーランドは分割支配され国家として消滅した。その間ドイツは支配地域のゲルマン化をすすめ、ユダヤ人に対する絶滅政策を強行し、1940年にヨーロッパ最大規模の強制・絶滅収容所 [L] に建設し、ここでポーランド出身者を含む多くのユダヤ人を殺害した。他方、ソ連は占領地域における反ソ的な動きを厳しく弾圧し、1940年には亡命政府と繋がりがあるとされたポーランド国内軍の将校1万人以上と旧体制関係者数千人を秘密裏に殺害した「 [M] 」事件が起きた。

第二次世界大戦後は、ナチ=ドイツからの解放を実現したソ連軍の影響力が強まり、その支援で共産政権が成立し、戦後は社会主義国家ポーランド人民共和国となり、ソ連の勢力圏に組み込まれた。

しかし、80年代に始まった、後に大統領となった [N] が指導するポーランド自主管理労組「 [O] 」による民主化運動は、その後の東欧革命の先駆となった。1989年9月には旧ソ連圏で最初の非社会主義政権が誕生し、ポーランド共和国となった。その後ポーランドは「欧州への回帰」を掲げ、1999年には集団安全保障機構であるNATO、 [P] 年には東欧に拡大したEUに加盟した。

2022年にロシアによるウクライナ侵攻が起きた後は、ポーランドは隣国として、EU内でドイツに次ぐウクライナ難民を受け入れ、積極的に支援するなど、NATOやEUでその存在感を発揮しつつある。

問1 1241年にドイツ・ポーランド連合軍を破ったとされるモンゴル軍の総司令官は誰か。答えなさい。

問2 (a) 第1回分割の際の3国の君主の名前の組み合わせとして正しいものを、以下の(あ)～(え)から一つ選び、記号で解答欄に記入しなさい。

(あ) ピョートル1世・ヨーゼフ2世・フリードリヒ2世

(い) エカチェリーナ2世・フランツ2世・フリードリヒ＝ヴィルヘルム2世

(う) ピョートル3世・マリア＝テレジア・フリードリヒ＝ヴィルヘルム2世

(え) エカチェリーナ2世・ヨーゼフ2世・フリードリヒ2世

(b) 第1回分割に参加した3国のうち、第2回の分割には参加しなかった国の名前を答えなさい。

(c) ポーランドの軍人で、アメリカ独立戦争に参加後ポーランドへと帰国、第2回の分割後に独立を目指して蜂起を指導したが失敗して捕らえられた人物の名前を答えなさい。

II 「台湾400年の歴史」をひもとくと、オランダ、清朝、日本、中華民国などの統治の影響を受ける過程で台湾の歴史が形成されたことに気付かされる。こうした台湾周辺地域をめぐる17世紀から20世紀にかけての諸国間の動向を記した次の文章を読んで、文中の空欄 ～ にあてはまる最も適切な語句または数字を記入しなさい。

台湾は、フィリピンの北側、中国南部の 省対岸、日本最西端の与那国島のさらに西側に位置している。地理的には海路の要衝とも言える位置にある台湾では先史時代の遺跡が発見されているため、数千年前から人間が住んでいたと見られるが、台湾が本格的に世界史の中に登場するのが17世紀以降であることから、「台湾400年の歴史」との表現が用いられることがある。その「台湾400年の歴史」を見ていこう。

ヨーロッパ諸国で台湾近海にまず到来したのはポルトガルとされている。ポルトガルが明朝と協力して倭寇討伐に協力したことから、1557年に明朝から中国南部の珠江河口西岸の港市である への居留が許され、以降は が対明貿易の拠点となった。この頃からポルトガル語で「美しい」という意味を持つ「フォルモサ」が台湾を示す呼称として用いられるようになったが、これはポルトガル船が台湾近海を航海する中で巨大な島を通過し命名したことが由来とされている。さらに続いてこの海域で貿易拠点を見出そうとしたのがオランダである。17世紀初頭にジャワ島北西に位置する (現在のインドネシアのジャカルタ)に拠点を置いたオランダ東インド会社は、1622年に台湾海峡上にある 諸島を占拠したが、明朝に追われた後、1624年に台湾島南部に城を構築し、台湾南部を統治下に置いた。一方で日本や中国との貿易を求め、フィリピンのルソン島西部の港市であるマニラに拠点を置いていたスペインは、オランダより少し遅れて台湾に到着した。スペインは1626年以降に台湾北部に貿易拠点を築いていったものの、1642年にオランダにより駆逐された。

台湾でオランダによる統治が進められていくようになった頃、中国大陸では明朝の支配体制が揺らいでいた。北方では新たな勢力が出現、後の清朝の太祖となる が全女真の統一を成し遂げ、1616年に国を建てた。なお、 の

姓は「アイシンギョロ」と言われているが、本来は「ギョロ」姓で、後年になり満洲語で「金」を意味する「アイシン」を冠したとの考えも示されている。 [E] は遼東の明朝の支配領域への侵入を開始、さらに [E] の子は明朝への攻撃を強め、1636年に国号を大清に改めた。また、東南の沿海地域でも東シナ海にて活動していた海賊たちの抗争と統合の動きが進んでいった。中でも、 [A] 省を拠点にオランダ東インド会社との私貿易や日本との貿易で富を築いた [F] は明朝の武官となり、台湾海峡から東シナ海一帯の海上権を掌握するようになった。

こうした明朝の支配体制が外部勢力により崩れつつある最中、中央における政治の混乱と共に、地方では農民反乱が相次ぐこととなった。反乱軍の中で頭角をあらわしたのが [G] である。自身を闖王と称した [G] は、厳格な軍規の下で租税減免などを掲げ、農民の支持を受けた。北京を [G] の軍により包囲された明朝第17代皇帝の崇禎帝は1644年に自害した。さらに [G] は万里の長城東端の要地にて明軍を率いていた [H] に投降を呼びかけたが、逆に [H] は昨日までの敵であった清軍と和議を結び、清軍の援助を受けて [G] の軍を攻撃した。 [G] が逃亡した後に清軍は北京に入城、以降は摂政のドルゴンの強力な補佐を受けた清朝第3代皇帝の順治帝が国の支配の基礎を固めながら、残明勢力を掃討していった。

残明勢力の一つとしてあったのが、東南の沿海地域に勢力を有する海上の武装勢力であった。特に、 [F] と日本人との間に平戸で生まれた [I] は「反清復明」の旗印を掲げ、 [F] が清朝に投降した後も清朝に対する抵抗を続けた。なお、幼名を福松と名付けられた [I] は明朝の亡命政権に仕えたことから、明朝の皇帝の姓である「朱」の使用が認められたことに由来し、「国姓爺」の異名でも知られている。対する清朝は、反清活動をおさえるために海上交通や交易を制限する厳しい [J] 政策をとり対抗、清朝第4代皇帝の [K] 帝は1661年に広東・ [A] 両省を中心とする沿岸住民を強制的に内陸へ移住させる法令を出し、沿岸住民が [I] を援助し連携することを断ち切った。本土との接触を断ち切られた [I] は艦隊を率いて台湾に向かいオランダの拠点を攻撃、台湾を占領した。1662年に [I] は亡くなったが、その後を継いだ子もまた台湾を拠点に「反清復明」の路線を継承した。雲南の藩王となった [H] らが起こした

反乱に呼応するように [I] の子はしばしば中国大陸に攻撃をしかけたが、やがて復明勢力の衰退もあり、台湾で孤立していった。1681年に [I] の子が没すると後継者をめぐって内紛が勃発、その隙をついた清朝の攻撃を受けた台湾の政権は1683年に降伏した。台湾占領後、 [J] は事実上解除された。

清朝が台湾に侵攻した目的は、反清勢力の消滅であった。実際、台湾を占領した当時の皇帝であった [K] 帝も積極的に台湾を版図に入れることを考えていなかったようである。そのために当初は台湾放棄論が浮上したものの、最終的に台湾を版図に組み込むこととした清朝は、 [A] 省の下に台湾府を置いて統治する体制を取った。

17世紀は台湾が世界史に登場する転機であったが、次に大きな転機となったのは19世紀後半である。台湾に漂着した琉球船の乗員が台湾の先住民に殺害されたことを口実に、 [L] 年に日本が台湾へと出兵する事件が発生した。また、ベトナムの宗主権をめぐる清朝とフランスとの間で戦争が勃発した際、フランス軍艦隊により台湾北部が攻撃され、 [D] 諸島が占領された。イギリスの仲介で清朝の [M] とフランスのパートノートルとの間でこの戦争の講和条約が調印されたが、このように台湾をめぐる高まる外患に対し、清朝は台湾の統治政策を消極的なものから積極的なものへと転換、その後台湾は省として正式に [A] 省から分離した。しかし、朝鮮半島の支配権をめぐる日本と清朝との戦争において清朝が敗れたことで、台湾をめぐる情勢は大きく変化した。1895年に日本全権の当時内閣総理大臣であった [N] 及び外務大臣であった陸奥宗光と、清朝全権の [M] 及び李経方とにより、日本と清朝との戦争の講和条約が [O] で調印されたが、この [O] 条約において台湾・ [D] 諸島の日本への割譲が認められたのである。 [O] 条約の批准後、日本は台湾統治のために行政機構として台北に [P] を設置し、台湾への皇民化政策を進めていった。なお、1919年に落成した [P] の庁舎は、現在も台湾の政治権力の中枢の建物として使用されている。

約半世紀に及んだ日本の台湾統治は、1945年に終わった。同年8月に日本が受諾した宣言において、「 [Q] 宣言の諸条項が履行に移されるにともない、日本の主権は、本州、北海道、九州、四国およびわれわれが定めた諸島嶼に限定される

ことになる。」との項目が盛り込まれたが、アメリカのフランクリン＝ローズヴェルト、イギリスのチャーチル、中華民国の [R] によって署名された [Q] 宣言では、台湾・ [D] 諸島などの中国返還の方針が決定されていた。日本は台湾から撤収し、中国大陸から来た国民党政府により接収された台湾は、中華民国の行政区画の一つとして台湾省となった。しかし、祖国への復帰を歓迎した台湾の人々は、やがて新たな支配者となった国民党政府に対して不満を募らせるようになる。その一つには、国民党政府が中国復帰以前から台湾に居住していた本省人ではなく、戦後に中国大陸から台湾に渡った外省人を重用したことで、本省人と外省人との対立が激化したことにある。そうした中で、1947年に警察官がヤミの煙草を売っていた女性を殴打したことに端を発し、民衆による抗議活動が起こり、大きな暴動へと発展していった。 [S] 事件と呼ばれるこの事件は、その後の台湾に深い影響を与えた。国民党を率いていた [R] は中国大陸で共産党との内戦の最中であったが、要請を受けて部隊を台湾に派遣、本省人の抗議活動を武力で鎮圧した。台湾現代史最大の悲劇ともされる [S] 事件による犠牲者は2万人以上とも言われている。

1949年、共産党との内戦に敗れた [R] は台湾に逃れ、台北を首都に中華民国政府を置いた。翌年朝鮮戦争が勃発すると、台湾の戦略的位置の重要性を認識したアメリカは、その後台湾に対する経済援助と軍事援助を行った。しかし、1970年代に中華民国の国連脱退宣言、さらにアメリカと中華人民共和国との国交樹立に伴い、アメリカの支持を失った台湾は国際的な地位の低下が進んだ。また美麗島事件と呼ばれる民主化運動の弾圧が起きるなど、内外からの危機に直面した。こうした中で、 [R] の跡を継いだ [R] の子は長年にわたり敷かれていた戒厳令を解除し、台湾における民主化を前進させた。その後、1988年に本省人として初めて台湾総統となった [T] により憲政改革が行われた。なお、 [T] は国家元首として [S] 事件の犠牲者に1995年に謝罪、事件が大きな暴動に発展した日は台湾では平和記念日となっている。

Ⅲ キリスト教はその長い歴史の中で科学や芸術に大きな影響を与えた。次の文章 A～E が説明している科学者あるいは芸術家の名を答えなさい。

A. 1471年生, 1528年没。ドイツの画家, 版画家。彼の宗教画には, 有名な祭壇画(「聖三位一体の礼拝(ランダウアー祭壇画)」)や「四人の使徒」がある。聖書の挿絵として広く用いられた彼の木版画は, イタリアの画家にも影響を及ぼした。彼の版画を特徴づけるのは, 綿密に観察された背景の風景画である。彼はカトリックの信仰を否定したことはなかったが, 宗教改革には共感していた。

B. 1475年生, 1564年没。イタリアの芸術家。彼はローマに赴き, そこで完成した「ピエタ」では, キリスト教的な簡素さと古典的な美しさが和合している。一時的にフィレンツェに滞在し, 有名な「ダヴィデ像」を制作した。その後, システィナ礼拝堂の天井に有名なフレスコ画を描き, 彼はまたその祭壇の壁面に「最後の審判」も描いた。彼は教皇庁に仕え続け, サン＝ピエトロ大聖堂の建築主任となった。

C. 1642年生, 1727年没。イギリスの数学者, 自然哲学者。当時の最もすぐれた物理学者であった彼は, 万有引力の法則を定式化し, 微分学を発見し, 白色光を正確に分析した。『プリンキピア』(自然哲学の数学的原理)において, 彼は宗教的確信を述べてもいる。彼にとって, 神への信仰は宇宙の秩序に主として依存していた。英国教会員であったが, 彼が個人的に三位一体の教理を否定した理由は, そのような信仰が理性で把握できないからということであった。

D. 1685年生, 1750年没。ドイツの作曲家。バロック音楽を代表する一人。1723年から没するまでライプツィヒにあるルター派の聖トーマス教会のカントルであった。彼の作品には, 二つの受難曲(「ヨハネ受難曲」及び「マタイ受難曲」)があり, 大規模なオラトリオ風受難曲となるよう福音書の記述にアリアやコラールを織り込んでいる。その他に「マニフィカト」, 「クリスマス＝オラトリオ」(クリスマスの季節用の六部のカンタータの連作), 「ミサ曲口短調」があり, この最後の作

品も典礼用の壮大なものである。彼の音楽は教派的な範囲を超えている。

E. 1828年生，1910年没。ロシアの作家，社会改革者。最も有名な小説である『戦争と平和』及び『アンナ＝カレーニナ』の刊行後，文学的な野心を捨てたが，道徳的・宗教的な主題に関して執筆し続けた。彼は正教会の形式主義に批判的になり，正教会は彼を破門した。彼は質素に生きようとし，自らの財産や家庭生活の幸せを否定した。最終局面での彼の宗教的な教えは，奇跡などの無意義なことを無視した福音書に従うことであると称した。彼はキリストの神性を否定し，また人の最大の善は相互に愛し合うことにあると信じた。

(E. A. リヴィングストン編『オックスフォード キリスト教辞典』より引用。文章は一部改変)

IV インドにおける異民族の流入について述べた次の文章を読んで、文中の空欄

A ・ B にあてはまる最も適切な語句または数字を記入し、下線部(1)～(3)に対応する問1～3に答えなさい。

インドの歴史を振り返るとき、インド人が「ジャンプ＝ドヴィーパ」(閩浮提洲^{えんぶだい})あるいは「バラタ族の国土」(バーラタ＝ヴァルシャ)と呼び習わしてきた、この逆三角形の亜大陸が、しばしば外国勢力の支配下に置かれてきたことをあらためて知らされる。近くは、1600年の東インド会社設立以降徐々に勢力を拡大していったイギリス人の手によって⁽¹⁾、19世紀初めにはほぼインド全域が植民地支配下に置かれ、 A 年のインド・パキスタンの分離独立まで、徹底的な収奪が続いた。それ以前には、11世紀初めにインドに侵入し始めたイスラーム教徒たちが、12世紀末から13世紀初めにかけてインダス・ガンジス両河流域を征服し、その後多くの王朝を成立させて、約550年の長きにわたって支配し続けた。さらにそれ以前にさかのぼると、紀元前4世紀の B の王アレクサンドロスのインド侵入を契機として、紀元前2世紀から約500年間、西北インドは、ギリシャ人・パルティア族・シヤカ族・イラン人などの異民族の支配下に置かれた。⁽³⁾

(桂紹隆『インド人の論理学問答法から帰納法へ』より引用。文章は一部改変)

問1 イギリス東インド会社による地稅徴収制度の一つとして19世紀初めに導入された、農民に土地所有權を認め、農民から直接地稅を徴収する制度の名稱を答えなさい。

問2 「偶像破壊者」とも呼ばれたスルタンのマフムードが支配した、アフガニスタンのトルコ系イスラーム王朝の名稱を答えなさい。

問3 イラン系のクシャーン人により建てられた王朝において2世紀前半に即位し、第4回仏典結集を行うなど、大乘仏教の保護や東西交易による繁榮をもたらしたとされる王の名稱を答えなさい。